

KSKQ

通信

# ゆうとおん

NO.108	2018年4月号	郵便振り込み口座 00910-9-106532
編集人 (社福) ゆうとおん ゆうとおん編集員会 八尾市久宝園 2-30-4		

一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)発行 定価50円



久住 小百合 (くすみ さゆり)

1964年生まれ。54歳。八尾中学校から藤井寺特別支援学校へ。大阪市立中央授産場を経てゆうとおんに。八尾市在住。

私、思い切って、家を出ました。いま、サービス付き高齢者住宅でひとり住んでいます。親も歳をとって80代。よくケンカしてたし、うるさく言われるし、お風呂に入るのが大変だったの。2時間くらいかけて一人で入って。それで家を出ようって決めて体験宿泊して、なんか、いけそうだなって思ったから決心しました。

52歳で自立！いま、すごく心地いい生活です。だからもううるさく言われたいし、お風呂も手伝ってもらえるし。それと、聞いて、聞いて！私、家を出てから20キロやせたんです。すごいでしょ。

## ここで、生きる

人シリーズ No.5

ゆうとおんに来たのは30歳すぎたころだったかな。それからずっと内職しています。仕事を続ける秘訣？ そんなもん、ない。

昔のことはあまり覚えていないけど、これだけは覚えてる。私、さだまさしが好きなんやけど、歌より顔が好きなんやけど、藤井寺特別支援学校のとときの先生で、さだまさしによく似た先生がいて、大好きでした。ホント顔がそっくり。めがねかけて髪型もおんなじで。先生の顔、見るだけでよかった。何回もいうけど、本当に、さだまさしそっくりで、大好きでした。この話、止まらなくなるからこのへんで。

いま私は、ご飯やパン、小麦粉の物は食べないの。おかずだけ。そしてリハビリを頑張っている。もうちよつとやせてスマートになったら、アリオで服を買いたいなと思ってます。かわいい服を自分で選んで買いたいんです。

(聞き手 M・K)

### 目次

- ・はーとの「休けい」事情……………山本 寿
- ・うえーぶ「生活介護」がスタートします…福井 志朗
- ・ほーぶのみんなと向きあって思うこと…富澤 久美子
- ・わたしの体験……徳山 大海 / 宮野 武 / 山口 由香梨
- ・虐待について考える……………堀 智晴
- ・リレーエッセイ……………北浦 加代子
- ・グループホームが完成しました……松田 健太
- ・当世作業所事情……………畑 健次郎

## ゆうとおん・はーとの「休けい時間」事情

さて、突然ですが、皆さんの職場の昼の休けい時間はどのくらいありますか？ 30分？ 45分？ いや1時間？ その時間は短いでしょうか。はたまた長いでしょうか。今回は「はーと」の休けい時間事情にスポットを当てて書いてみたいと思います。 (山本 寿)



「はーと」では12時からの昼食後、食べ終わった者から休憩に入っていきます。(作業の関係上、パン工房は時間がずれませんが…)そして13時になると、基本午後からの作業が始まります。その間、人によって多少の違いはありますが、20分から40分くらいの時間があります。職員にとっては、仕事の流れの中に、昼食後の30分があります。この30分はいわば繋がっています。

ではメンバーさんにとってはどうなんだろうか：作業時間の拘束からほんの少し自由になる時間で、この30分は作業の延長線上にはむろん繋がってはいないように思われます。短い仮眠をとる人、音楽を聴く人、喫茶でティータイムする人、職員を捕まえて話をする人、親しい仲間と談笑する人、人それぞれの過ごし方があり、その中で、作業中とは少し違うもう一つの顔が見え隠れします。

AさんやBさんは、話が出来るような職員を見つけては、自分たちの興味のある私ワールドの独特な世界に引き込みます。少々一方通行でマニアックな会話ではありますが、その表情は誇らしげに感じます。なかでもAさんの世界は独特です。まるで私達が睡眠中に見ている夢のようです。TVやネット・ゲームの世界の人から、以前の事業所のスタッフなど彼に関わってきた人たちが時空を超えて一堂に登場してきます。話を聴いていて、無意識にでも彼に何らかの影響を与えてきた人たちなんだろうと思っています。「奇異」というより

「彼のもう一つの世界」、そこに時々私も同行させてもらっています。事務所からCDを持って行って音楽を楽しむCさん、そこに一人、二人とやって来ます。会話は決して弾んでいるようには見えませんが、まったりとした空気が流れます。まさしく「ザ・休けい」という光景に、余計な声かけは必要なしという感じですが。「何か楽しいことはないか？」と事業所内をウロウロすることが多いDさん。神出鬼没と色々な場所に顔を出しては、次の場所へ。それが彼のペースなのか、はたまた彼にとっては「休けい」という名の時間の間(はさま)なのか。いつもの作業中の様子を見ているとたぶん前者なのだろう…。

昼食後に繰り広げられる短くもあり長くもある30分。たかが30分、されど30分。でも多分職員が感じているよりも大切な30分。この時間が良い意味での気分転換、午後からの仕事への活力に繋がっていることを信じたい。



ゆうとおん・はーとの正面玄関



●ゆうとおん・うえーぶ

# 4月から「生活介護」がスタートします

この号が完成して、みなさまのお手元に届く頃にはスタートしていると思いますが、編集段階の現在においては、事業申請や事業所内での調整作業の真っ最中です。

(福井 志朗)

「うえーぶ」は、この数年「就労継続支援B型事業」のみで運営してきました。「うえーぶ」にはクッキー班があり、紙漉き班があり、内職班があります。以前はさをり班もありました。パン工房が「ゆうとおんはーと」で作業するようになってから、自主製品の売上げの主力商品が変わったかもしれません。少なくともそれまではクッキーが「ゆうとおん」を代表する商品だったことは間違いないと思います。また現在も同じだと思います。そうした意味でも「うえーぶ」は、「ゆうとおん」の中でも販売、外部との繋がりの窓口的な役割を果たしてきました。

## 徐々に高齢化の波が

そのような「うえーぶ」も通所される方の年齢も上がり、身体介助が必要な状況になってきました。「生活介護」の定義は、「常に介護を必要とする方に対して、主に昼間において、入浴・排せつ・

食事等の介護、調理・洗濯・掃除等の家事、生活等に関する相談・助言その他の必要な日常生活上の支援、創作的活動・生産活動の機会の提供のほか、身体機能や生活能力の向上のために必要な援助を行う」とあります。毎日仕事をしたり、一緒に過ごす中で、避けることのできない高齢化の現実を目の当たりにするようになりました。数年前まで歩いていた方が（疾患の関係もありますが）大きく身体状況が変化したり、膝関節症の方に付添いが必要になったりと、身体介護の必要性はどの何年かで急激に増してきていると思います。

意欲と誇りをもって働き続けられる場に

しかし、身体的な変化はあっても仕事への意欲はほとんど変わらず誇りも持たれている、仕事の能力や情熱は保たれることに気がきました。

「働く」ことは、人の営みの中でも大きな意味合いを持ち、自分の存在意義や価値観を高める人にとって欠かすことの出来ない行為だと思います。「生活介護」には「介護」という言葉があるので自然とそのイメージが先行しがちですが、「働く」ことに関しては変わらないはず。通所される当事者の方一人ひとり、働き方や仕事の価値観は違えども「働く」ことはその方の自己肯定感を高めています。「ひとつ上の自分になれる」ための「働く」を、これからも応援していきたいと思えます。

●ゆうとおん・ほーぷ

# 「ほーぷ」のみんなと向き合って思うこと。

支援は、いつも迷いの連続で、正解というものが無い。自分のやっていることに嫌気がさすこともたびたびだ。それでも、迷いや揺れを手放さずに考え続けることが大事だと思っている。

富澤 久美子

「これでもいいのか…」

それは、支援なのか、はたまた職員の見方、価値観の押し付けなのか、例えば、食事中にウロウロしてしまう。声掛けはするがなかなか止まらず、手を引いて座らせる。お茶にこだわりがあり、何度もおかわりをして、2ℓのペットボトルが空になるまで終われないところを止める。声掛けはするが、はやり、なかなか止まらず、半分強制的にお茶の場所から移動させる。人のお茶が気になったり、ペットボトルが気になったり。

例えば、自分の作業室に入れない人に、あなたの部屋は、ここなんだから、そこで、仕事しなさいと誘導する等々…。日常を皆と一緒に過ごす中で、様々な縛りが生じてくる。それは、

ある人からは、虐待に見えたりもする。いや、虐待なのかもしれない。支援員の価値観もさまざま、それをよしとする者もあれば、いや、それはあかんやろという者もいる。当事者にとっては、嫌なことでも、支援者から「これは、わかってくれよ」と訴え、アプローチすることもあると思う。それは、皆と共に気持ちよく過ごすためや、あなたにだってできるはず、という気持ちがあるからなのだが、考えてみると、そもそも、当事者本人が、みんなと共に気持ちよく過ごしたいと思っているのか。

最近、当事者の方とこんな会話を交わした。「あなたは、就Bなんだからこれぐらいの意識は、持って仕事に取り組んでください」

「でも〇〇さんもしないやん」

「〇〇さんは、生活介護だし、あなたとは、工賃の額が違います」

こんな会話は、よくあるなあと思ってしまうが、工賃額の差なんて、たかが知れていて、そんなことでは、この人の意欲を引きだそうとしていない自分に、支援員を長くやっているにもかかわらず、この程度かと自分に嫌気がさす。

正解のない支援に、迷い、ゆれ、考える

ほーぷのみんなと向き合うということは、否が応でも、いろんなことを突き付けられる毎日であること。

これでもいいのか、あの人は、どう思っているんやろと、自問自答の毎日であること。正解のない支援というものを考える毎日であることだと感じている。

たい けん

# わたしの体験

昨年11月、広島で開催されたピープルファースト大会に「みんなできめる会」から4人が参加しました。今回は、よせられた3人の感想を紹介します。

●ぼくは、はじめてのピープルファーストで、とても、きんちょうしました。まわりは人だらけで、それも全国からきている人がいっぱいいました。その人たちは、障がいのある人たちばかりで、とてもびっくりしました。ぼくは感心しました。みんな障がいがあるのに、ここまでやれるのはすごいと思いました。やまゆり園の事件も大藤園の事件も、みんなゆるさないという思いが伝わってきました。ぼくもゆるさないです。ピープルファーストにいったことは、これからもこの活動がんばってつづけてほしいと思いました。ゆうとおんでやっている、きめる会も、がんばってつづけていけるように、みんなで協力しあっていきたいと思っています。ぼくは、きめる会に参加してよかったなと思いました。はじめて食べたひろしまのお好み焼きは、とてもおいしかったです。今度は、ゆうとおんの旅行で行きたいです。



とくやま だいき



みやの たけし

●新幹線でピープルファーストにみんなで広島に行ってきました。ホテルにもつをあずかってもらい、みんなで平和記念公園内の原爆ドームをみました。ひとつ思ったこと、すごい原爆でやけているなと思いました。全国大会では、いろいろなところから、さんかしているのだなと思いました。ほっかいどうから参加している人もいたり、大阪の人も参加していました。「つくいやまゆりえん」の話がされました。グループホームの話を書いてから20分の休みがありました。そのとき、ぼくは、めいしをしていました。徳山君にめいしのわたしかたをおしえてあげました。「生活保護と年金」の分科会でしました。年金のお話は、小田島栄一先生のお話で、年金のことはいいベンキョウになりました。生活保護やグループホームのお話もありました。なかには、ひとりぐらしのお話もありました。ほくも、いけんの時てをあげました。終わってから、原爆資料館をみました。いろいろなてんじひんをみました。戦争のぼめんもみました。

●ピープルファースト広島大会について思ったこと。1日目、グループホームのひとりぐらしの話とか、さべつ、ぎゃくたいについてのべんきょうかいと、あと、せんそうについてかたってくれました。二度と(せんそうの)ない平和な町になってほしいと思いました。広島やきもたべました。とてもおいしかったです。げんぱくが落とされたところも見ました。すごいかわいそうだなと思いました。スピーチをしようっていうパンフレットをもらって、全部こたえた人は、おかえりのさいに、しょうじょうをもらいました。



やまぐち ゆかり

シリーズ3

# 虐待について考える



堀 智晴（ほり・ともはる）

1947年生まれ。長い間、障がいのある子どもの保育、教育について、現場の保育者や先生と共同研究に取り組む。「今は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きていけばいいのかについて考えています。みなさん、一緒に考えましょう」。インクルーシブ（共生）教育研究所代表。ゆうとおん理事。

今のままではよくない！

今回は、ゆうとおんで実際に起きている生々しい問題について考えます。職員にくわしく話を聴きました。実際に虐待があったのかどうかは、はっきりしません。しかし、どこかに問題はあるようです。私は、今のままでいいとは言えないな、と思いました。

「ここは働く場所」という前提？

職員に話を聞かせてもらっている時、「この場は、働くところです」という言い方がされた時、私は違和感を持ちました。この見方はまちがっていない、という強い確信を職員の発言に感じたからです。この見方は、まちがっていないのかどうか、です。

「この場は、働くところです」、だから、当事者さんが働いていない時、「仕事をして下さい」と声をかけて、働くようにうながすのは当然でしょ、というひびきを感じたのです。このことをみなさんはどう考えられるでしょうか？

なるほど、特におかしいということはないように思えますね。はたして、そうでしょうか？ ちよつと考える必要があると私は思いました。

それは、①ここは、本当に働く場なのか、それに見合う「手当・給料」を得ているのか？ ②この場は確かに働く場、仕事をする場なのだけれど、どのように働いたらいいかという働き方については、職員と当事者さんとの間で共通理解ができているのか？ ③日頃からの職員と当事者さんとの関係はどうなのか、上下関係になっていないのか？ ④働いている人⇨当事者さんの意見や要望は認められているのか？ などなどさらに深く検討してみる必要があると思うのです。

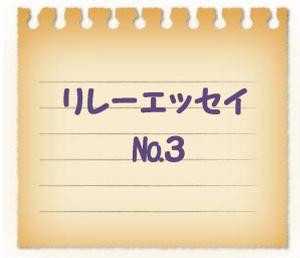
当事者さんの行動には、わけがある

一番の問題は、「この場は働く場なので、働かないでさぼることは許されない。何をしてんの！」と、当事者さんが働いていない（ように見える）行動を、そうしているわけを考えずに、職員が注意し叱責してしまうということです。

「ここは働く場だ」という見方にゆとりがないと、職員は監視する人になってしまうおそれがあるのではないのでしょうか。

今、安倍内閣は働き方改革を言っていますが、どこか（押しつけ）の感じがしますよね。

今回はこれだけの問題提起にとどめたいと思います。



# 「うまく生きる」って…

「糸いれて、足ふみかえて、とろんとろん。」  
「さをり班」の日常の声です。落ち着かなくてザワザワした時、心に音やリズムを入れると人は少しだけ和んでくるようです。

「年齢に応じた対応を！」と、厳しい声も聞こえてきそうですが、オサにかけた100本以上の糸を束にして「えんやこらせくどっこいせく」と、かけ声のせて引き込むと、硬い表情で糸を結んでいた人は「ふふふ」と笑いだし、泣きながら暴言を吐いていた人も得意なギャグを飛ばしはじめ、不穏な空気は一変します。

みんな欲求を訴える時は一生懸命ですが、仲間が困っている時もよく見ておられ、黙って頭をさすったり、母親のような声をかけたり…。親子ほどの年の差はあるものの、一般社会のように年齢や経験に

よって態度を変えることもなく、同じ“仕事をする仲間”として関わっておられるようです。

私は以前、広告の仕事の傍ら、縁あって知り合った作家仲間の力を借りて、町家カフェ&ギャラリーをしていました。広告のように流通(消費生活)に左右されるモノではなく、創り手と買い手とのつながりを大切に『こころ、ゆたかに』なれるモノを創り、提供することに力を注ぎました。

中には障がいを持つ人たちの陶芸作品や、心に病を持つ海外の人たちの絵画などもありました。国や地域、障がいがあるなしにかかわらず、みんな訴える気持ちはとてもシンプルでストレート。見る人の心を釘付けにします。今、“さをり班”で創っている作品も同様です。職員が小細工を施すこともありますが、想像以上の織ができた時は顔がほころびます。みんなの持っている感性に、とてもいい刺激を受けています。

ある新聞に、こんなことが書かれていました。

「人と人が支え合える空間」(社会活動家で法政大学教授の湯浅誠氏)と題した記事の一部です。

…支援する側・される側という垂直的な関係から、人と人が支え合うという水平的な関係に転換するためには、「本来、誰にもよりよく生きる力が備わっている」ことを、信じて向き合えるかどうか

が重要だと感じます。

私は、これまで「ともに生きる」共存だと、大きな勘違いをしていました。本来あるべき「ともに生きる」は理屈ではなく、同じ作業をする身近な人との関わりの中で気付いていくものなのかもしれません。とても大変な仕事ではありませんが、もう少しみんなの感性に触れながらモノ創りを続けていきたいと思えます。

(北浦 加代子)





「ナクルナイサー」の全景

新しい「ものがたり」が始まる家に

# グループホームが完成しました

ゆうとおんの新しいグループホーム建設のきっかけは、消防法の改正のため、2018年4月から、支援区分4以上の方が8割以上を占めるホームにはスプリンクラー設置の義務付けが決まったことからでした。

(松田 健太)

## ずっと安心して暮らせる家

「いつか、高齢になっても安心して生活できる住宅を造らなければ」と、ゆうとおんの中でも、ぼんやりと検討はされていましたが、きっかけがないまま数年経ってしまった。法改正は、考えようによつたら背中を押してもらい、ちょうど良いタイミングだったように思っています。

今回は、2018年4月と期限が切られていたため、ゆつくり考える間もなく動き出す必要がありました。まずは建設用地の確保からです。予算の都合上、家庭的な小さな家を何軒も建てる余裕はなく、10名で暮らせるかなり大きめの一戸建て住宅用の土地探しでした。

当然のように、土地の選定にあたっては難航を極めました。最後の最後に「これは」という土地に巡り合うことができ、建設会社との細部にわたる打合せがスタートしました。

## 迷いながら、優先順位をつける

今回、予算が限られている中でまずやることは、全てに優先順位をつけることでした。

男性用住宅なのか、女性用住宅なのか？ 誰に入居してもらうのか？ エレベーターは設置するのか？ 全て簡単に結論が出るものではないのですが、今回、かなわなかったものについては、時間を経て少しずつ形にしていく予定をしています。

## 少しでも快適な家に

予算をあまりかけない範囲では、こだわられる部分には徹底的にこだわりました。

ミストサウナや浴室暖房、床暖房、リビングの天窓、部屋ごとの色調や扉や床材の選定、その他全て直接自分たちで選んでいきました。

ただ、どんなに頑張ってみたところで、障がいのある人たちに、一つの住まいで一緒に過ごしてもらおうことへの後ろめたさが消えるわけではありません。建物が完成した後、達成感よりも疲労感を強く感じてしまうのは、この世が抱えている矛盾の真ただ中で仕事をしているせいなのかもしれません…。

これからこの住まいで、良いことも、辛いことも、楽しいことも、悲しいことも、色んなエピソードをひとつずつ遺していつてもらえたら、そこに自分もほんの少し関わられたら、それ以上の望みはありません。



↑ 対面キッチン。収納を多くしました。



↑リビングの中央には天窓をつけ室内を明るくしました。気の合う仲間と食事ができるように食卓は2カ所設置。角張った仕切りをなくして丸いカーブでやわらかな雰囲気。



玄関のアプローチ



↑居室は床材やクロス、ドアを部屋ごとに変え、「わたしの部屋」らしくしました。



↑2階部分。予算の都合でエレベーターを断念しました。



↑2カ所のお風呂は浴室暖房でミストサウナ付きです。賃貸マンションの狭い浴室から開放されてこれからはゆったりお風呂を楽しめます。

## ●当世作業所事情 70

## 「共に生きる」ということ

## 周辺風景 その3

畑 健次郎

4時に事務所で会う、という約束の時間が迫っていました。作業所を出ようとした時、Aさんに呼びとめられました。不安そうな表情です。

「(職員の) Bさんが話しやすいけれど、今は(仕事の関係で) 無理と言われました。だれが私の話を聞いてくれるんですか」

「(職員の) Cさんに話してみたら」と流してその場を離れようとしたが、Aさんは不安そうな表情のままです。二言三言話しているところに、帰り支度の人々ががやがやとやってきました。「またね」というタイミングで大急ぎで事務所に戻りました。

たまに彼女の話聞くことがあります。Aさんは自分の状況や気持ちをスマホに記録しています。しんどさが伝わってきます。Aさんが求めているのは「回答」でないと感じつつ、私は回答を探し

ます。そして「気持ちの持ち方が大事」などと、とんちんかんな対応をします。アバウトで無神経な私は、Aさんの心に分け入ることができません。

「また浮気して(飲み屋の) ママのところに行くくんやろ」Dさんは私と顔を合わせるたびに、あいさつ代わりにその手のジャブを繰り返します。

「(残念ながら) ママは金のない人間の相手はしてくれへん」と適当に返しておきます。

子どもの頃から知っているDさんですが、もちろん能天気なだけではありません。時々、微調整が必要なDさんなりの「屈折」があります。

他愛ない話は出来ても、自分の調整能力のあやしさは自覚しています。



自分で選んでやりだした仕事だけど、時々、なんでこんな似合わんことをしているのかと、ため息をつくことがあります。ゆうとおんがスタートする前、少人数で自営業に近い仕事をしていました。その前は大きな組織の一員でしたが、自分自身、他人は他人という流儀でやり過ぎてきました。ゆうとおんがはじまってから、他人とのかかわりが以前より濃密になりました。当初、私自身は金をかせぐために配送の仕事に出ていることが多かったけれど、作業所に帰ると、何となく癒された気分になりました。他人と「働く」のも悪くないなあと思ったものです。障害当事者と職員

を合わせて10人そこそこで始めた作業所ですが、今では100人を超えてしまいました。

「スモール・イズ・ビューティフルはどこへ行ったのか」という批判を自分自身に向けねばならなくなりました。いやいや、自分たちの思いを実現するためのスケールメリットもあるから、という言い訳じみた自問自答を繰り返しています。

たとえばYさんにかかわる問題もそうです。Yさんがやってきた20年近く前、ゆうとおんは少しにぎやかになりました。それでも一人一人の顔と個性は見えていました。

はじめての事件は約半年後でした。子どもが好きで連れまわした結果の「犯罪」です。刑期を終えた彼を受け入れることに何のためらいもありませんでした。

2007年1月の2回目の事件では、この仕事の厳しさとむつかしさを痛感させられました。このころから、ゆうとおんは私たちそのものではなく、自分はゆうとおんという(外化された)組織の一員であることを自覚せざるを得なくなりました。このまま地域でふつうの暮らしをしていけばいいという、個人的な見解は自制せざるを得ませんでした。出所後の一月半は地域で暮らしましたが、5月には大阪府の訓練施設に入所して、そこで2年暮らしました。

地域に帰ってきて10ヶ月余りで、また事件が起こりました。出所は2017年の10月でした。

この間、ゆうとおんでは彼の受け入れを「確認」してきました。しかしYさんは刑務所から精神科の病院に直行しました。刑務所・保護観察所の依頼を受けた支援組織の主導による社会的入院でした。支援方針は明確でした。(できれば)ゆうとおんには戻さない、入院期間中に行き先を決めるというものでした。明確でなかったのは、彼の先行が「地域」なのか「入所施設」なのかという点でした。

彼は拘置所でも裁判でも「ゆうとおんへ帰りたい」と訴えていました。刑務所に移ってから、刑務所側の意向で、私たちはYさんに会えなくなりました。その間、件の支援組織のEさんはYさんとの「信頼関係」を深めます。「専門家」も含めてYさんの事をよく知らない人たちは、時にはよく知っているはずの人たちでさえ、Yさんが「ゆうとおんへ帰りたい」というのは彼の「経験」の少なさからくる選択肢のなさからだと言います。ここには知識の量を「経験値」だと錯覚する、健全者とされている人たちの奇妙な驕りがあります。彼は通常ではありえないほどの体験をしています。学校生活での愛着といじめ、一般就労での誇りとたかり・いやがらせ、その後、どの職場も長く続かなかった挫折感、大型入所施設での競争と確執、絶対服従の矯正施設…。そうした中で、彼を排除の対象としなかった職場がゆうとんであり、彼をあたたかく迎えてくれたのが「今池

子ども会」でした。お世辞と皮肉まじりに、Yさんが「ゆうとおんに帰りたいというのは土橋さんと畑さんがいるから」という人もいますが、それは正確ではありません。Yさんにとって、土橋や畑も含んでいるゆうとおんそのものが帰りたいところなのです。

Yさんが入院してからしばらくして、病院側の計らいで面会できることになりました。以前より生気のないのが少し気になりましたが、Yさんは「できればゆうとおんに帰りたい」とはっきり意思表示しました。ここから具体的な受け入れ態勢の討議を再び開始することになります。紆余曲折を経てではありませんが、この4月からYさんは戻ってきます。

さて、ここからは書くべきかどうか迷ったのですが、大事なことだと思うので、事実関係を記しておきます。

今回Yさんがゆうとおんに戻ることになったのは、ひとえにYさん自身のがんばりです。社会的入院一般を否定するものではありませんが、今回の入院措置は限度を超えているのではないかとの疑問を持ちました。「ゆうとおんに戻りたい」と意思を示しているにも関わらず、彼を取り巻く支援関係者は「ゆうとおんはやめておいた方がいい。他のところも体験してみるべきだ」と説得をつづ

けました。病院は「治療」あるいは「休息」のためでなく、「説得」のための舞台でした。ゆうとおんとしては、これは人権侵害にあたるのではないかと認識を持ちました。Yさんに関わっていた弁護士さんの助言もあって、大阪弁護士会へ訴えを出しました。弁護士会は動いてくれたのですが、Yさん自身がよく知らない弁護士さんを警戒して、上手くいきませんでした。しかし、そのころ、Yさんの「頑固」さに手を焼いた他の支援関係者も、ゆうとおんで仕方ないかとなりました。

Yさんは満期出所でした。ふつう、刑期を終えれば通常の市民の権利は保障されるはずですが。その時点での彼の意思は「できればゆうとおんに帰りたい」ということでした。ゆうとおんへというYさんがいて、帰っておいでというゆうとおんがいました。ところが、知的障害を持つYさんを、支援関係者は「入院」へ誘導しました。ノンの声をあげなかった私たちも、結果的に追認しました。Yさんを取り巻く支援関係者(ここにはゆうとおんも含まれます)が市民的権利や当事者の意思決定をもう少し尊重する姿勢を持っていたならと反省します。

Yさんの抱えているリスクを軽視するつもりはありません。しかし人は生きていくだけで、大なり小なりのリスクを抱えた存在です。その延長線上にYさんのリスクを捉えるのか、「累犯障害者」のリスクとして特化するのか。その人の人生観や人間観が問われるところかなと感じます。

〈 ゆうとおん設立の思い 〉

活気があるけれど ゆったりしていて  
真剣だけれど かたくるしくなく  
とりあえずそこにいれば  
心と体がホッとする  
どこにでもありそうで  
どこを探しても なかなかみつからない  
そんな《しごとば》をつくりたい

ひくつにならず ごうまんにならず  
小さなちがいに とらわれず  
小さなことも ないがしろにせず  
失敗も たくさんして  
どんどん じゆうになっていきたい

いろんな人がいてこそ社会  
いろんな人が生かしあえる関係  
だれもが共に ゆったり  
生きてゆける 社会をめざして  
障がいのある人 お年寄り  
子供 だれにでも  
開かれた場作りをしてゆきたい  
仕事のために人がいるというよりも  
人のために仕事があるということ  
忘れずにゆきたい・・・

- ・1996年 4月 無認可作業所ゆうとおん設立
- ・2006年 4月 社会福祉法人格取得  
小規模通所授産施設 開所
- ・2008年 3月 障害福祉サービス事業所指定  
就労移行・就労継続支援事業開始
- ・2008年 9月 ゆうとおんうえーぶ開所  
就労移行支援・就労継続支援事業
- ・2009年 5月 ゆうとおんはーと開所  
生活介護事業
- ・2011年 9月 ぼちぼちいこか開所  
居宅介護事業
- ・2011年 10月 スタコラハウス開所  
就労継続支援
- ・2013年 5月 ゆうとおんはーと開所  
就労継続支援・生活介護事業
- ・2013年 10月 ゆうとおんはーと内  
マル・デ・パン  
マル・デ・カフェ オープン
- ・2014年 4月  
生活の場わらゆん開所 共同生活援助事業  
開所ホーム名：ナンクルナイサー
- ・2014年 4月 のびやか開所 相談支援事業
- ・2014年 9月 共同生活援助事業  
開所ホーム名：ピリカ
- ・2015年 4月 共同生活援助事業  
開所ホーム名：どれみ・みそら・ゆっくり  
のびのび
- ・2016年 4月  
ゆうとおんほーぷ 開所  
就労継続支援・生活介護事業

社会福祉法人 ゆうとおん

本 部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133 TEL 072-993-0785 FAX 072-993-0784  
 ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1 TEL 072-926-6200 FAX 072-926-6199  
 ゆうとおんうえーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4 TEL 072-926-1543 FAX 072-921-8883  
 ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2 TEL 072-927-1300 FAX 072-927-1301  
 スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11 TEL 072-995-4387 FAX 072-995-4387  
 メールアドレス / [youtone@live.jp](mailto:youtone@live.jp) ホームページアドレス <http://www.eonet.ne.jp/~youtone>  
 年会費 / 1口 2,000円 振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4 階

定 価 / 50円